

メタファー表現はどうやって (話の集合に) 発生するのか? 産出を強制選択と見なした場合の, メタファー表現産出のもっとも弱い説明仮説*

黒田 航

独立行政法人 情報通信研究機構 知識創成コミュニケーション研究センター

Modified on 08/03, 05/08/2009; 12/29, 06/25/2008; 12/04, 11/19,25, 10/07,10,14/2007;

Created on 10/06/2007

1 はじめに

この短いノートで私は文の産出を語の強制選択の組合わせと見なした場合に文の特定の箇所にメタファー表現を含む文が産出されるプロセスを説明する最弱な仮説を提示する¹⁾。これは私の [22] の内容の一部を補完するものである。その仮説では, 概念メタファー自体は表現を生成せず, 概念メタファーは別の仕組みで独立に生成された表現候補を順位づけ際の評価基準に使われるだけであると考えられる。別の言い方をすると, 概念メタファーそれ自体は何ら生成的/説明的ではないということである。

2 強制選択課題としての産出

以下ではメタファー表現が言語 L に存在する理由を, (概念メタファー理論 (Conceptual Metaphor Theory: CMT) [8, 9] がそうするように (概念) メタファーをヒトの思考の仕組みとして理由づけるのではなく), ヒトのコミュニケー

ション上の相互適応の産物として説明することを試みる。説明に入る前に大前提を確認しておこう:

(1) 問い 1:

特定の言語 L (e.g, 例えば日本語) の表現の集合の中にメタファー表現=形式 f_1, f_2, \dots, f_n (e.g., “ヤツはこの会社の寄生虫だ”) が存在するのはなぜか?

(2) 自明な答え:

L の話し手の誰かが何らかの理由/目的 P で表現 f_i をメタファー表現として産出し (f_i がメタファー表現として共有資源化し) たからである。

(3) 問い 2:

では, 理由/目的 P とは何か? — 具体的には, ある話し手 s が問題のメタファー表現 f_i を産出した動機は何か?

この論文で問題にするのは (3) の P の中身の問いである。

2.1 問題の設定: 話し手はどうやって形式を決めるのか?

ヒトは話す。これは不思議な事実であるが, 確かである。だが, 次のことはどれほど明らかなのだろうか?

(4) 話し手 (speaker) は発話の際にどうやって具体的な発話の形式 (speech/utterance form) を決めるのか?

* このノートの概要は, 私の鍋島氏への反論 [22] の執筆をきっかけに構想され, 関西言語学会第 32 回大会で伊藤創 (大阪大学大学院) の口頭発表「「空間から時間へ」概念メタファーの考察: 「先」「前」「後」の分析を通じて」を聞いて一気に明確化した内容を簡単にまとめたものである。直接の面識はないけれど, このようすばらしい機会を与えてくれた発表者の伊藤氏にはこの場を借りて感謝の意を表したい。また, 私は執筆の際, 加藤鉦三 (信州大学), 中川奈津子 (京都大学大学院) から重要な点を指摘を頂いた。この場を借りて感謝の意を表したい。

¹⁾ 提案の内容は Ortony の借用仮説 (loan word theory) と本質的な部分は変わらない。それと違うのは評価の候補の生成メカニズムの明示化により, 概念メタファーの役割を明示化している点である。

これを発話の形成 (question of speech formation) の問題と呼ぼう²⁾。

これは難しい問いであるが、私が見る限り、言語学者の多くはこの問題に関心を示さない。多くの研究者はこれと自分の研究とに関係がないと思っている。確かに一般的に見て、統語形態論の範囲内では、これが問題になることはないと言っていいただろう。

その一方、言語学者の一部には (5) に示すような素朴な言語使用観をもっているだけでなく、その言語観を通じて問題を説明できると考えている人々がいる。³⁾

(5) 話し手 (speaker) は自分が世界を認識 (recognize) \approx 認知 (cognize) した通りに話す。

だが、運用論=語用論 (pragmatics) のレベルで発話の意味を問題にするならば、(5) は明らかに素朴すぎる。特に「形が異なれば、意味が異なる」と言って機能主義的な立場を採るならば、そうである⁴⁾。

2.1.1 発話の効果の最大化

問題をはっきりさせよう。ヒトは何らかの効果を狙って発話をする (生物は何らかの効果を見こんで行動する)。ヒトが賢い動物なら、効果の実現を効率的に行おうとするので、効果の実現の効率化は発話を動機づける強い要因であるはずである。証拠を挙げることはしないが、ここでは (6) には十分な妥当性があると考える:

(6) 適切な形式の選択を通じた発話の効果の最大化 (Effect Maximization through Apt Choice):⁵⁾

²⁾ 言語処理や人口知能の分野では、これは生成 (generation) の問題と呼ばれ、認知心理学では産出 (production) の問題と呼ばれる。前者の用法は部分的には生成文法 (の誤解) に基づくものであるが、正確には生成言語学の生成と関係がない。

³⁾ 個人的な観察によれば、認知言語学者と自称する一派には特にその傾向が強い。

⁴⁾ 認知の通りに話すという想定と異なる話し方が幾つか存在するという事実を両立させるために、認知言語学者は「認知モード」の異なりという概念を導入するが、それが本当に不可欠な仮定なのかは非常に怪しい。

⁵⁾ これは関連性理論 (Relevance Theory: RT) [2, 12, 14] の想定と互換だが、RT とは独立に定式化可能であり、かつ、必ずしも RT の枠組みから成立が予測できるこ

話し手 s が発話 u に効果 e を期待しているのであれば、その期待が強い分だけ、効果に e をもつ発話 u_1, u_2, \dots, u_n のうちで (他の条件が同じであれば)、 e が最大となるような発話 u_i を選択する可能性が高くなる。

少なくとも話し手が最小労力で最大効果を得ようとする生命体であれば (6) のようにしているはずである。実際、発話による効果の達成も (ほかの行動と同じく) 効率化に向けて一定の淘汰圧がかかっていると考えるとよいはずだ。

2.1.2 話し手は形式を戦略的に選択する

(6) の想定が正しいとすれば、話し手 s は—(5) で想定されているように—単に自分の認知=認識した通りに発話を構築している保証はしない。(5) で問題にした「認識した通りの発話」がここで問題にしている意味での効果が最大の発話であるなら、(5) は発話形式の説明となり得る。だが、それは無条件にありそうなことではない。従って、話し手が認識の通りに発話の形式を選んでいるという想定には十分な根拠があるとは言えない。

(6) の想定が正しいとすれば、 s は—どれほど自分で自覚しているか不明であるが—発話の形式の選択 (selection of speech form) に関して戦略的 (strategic) である可能性が高いということである (が、これは進化論的に考えても、特に驚くべきことではないだろう)。

2.1.3 仮説の提示

以上のことをまとめ、以下の議論の前提となる仮説を (7) に明示する:

(7) 話し手 s が特定の発話の形式 u_i を他の形式 u_j より強く選択 (\approx 選好) するならば、 s が実現を望んでいる効果 e の最大化の見こみが (少なくとも s にとっては) u_i より u_j の方が高いからである。

ただし、 u_i が s (や聞き手 h) の認知をそのまま言語化であることは、 u_i に効果 e の最大化の見こみが (少なくとも相対的に) 高いことを保証しないので、(5) は問題の効果の最大化を説明にはならない。両者は無関係ではないかも知れな

とではないという点は強調しておきたい。

いが、もっと精練された説明が必要である。

以上の問題意識の下で具体的な問題を設定する。

2.2 問題の設定

メタファー表現の産出で説明すべきこと(と説明の不要なこと)を正しく認定し、定義するため、基本的問題を設定する。ただし、§2.2.1では漠然とした問いを示し、それに続く§2.2.2で詳細な問いとして問い直す。

2.2.1 曖昧な問い

次のような状況を想定する:

(8) 人物 *P* は友人 *F* から、彼の上司 *M* に正当な見返りなしにこき使われている状況を説明され、気の毒に思う。*M* は *F* をまるで自分の家畜か何かのようにこきつかっていて、それを当然と思っているようだ。*P* は *M* への義憤と *P* への同情を表わそうとして、少し言葉を選んでから *F* に

a. きみはとんでもない上司に搾取されているなあ

と言った。*P* の気持ちは *F* に伝わったようだった。

(8a) はメタファー表現である。なぜなら *F* の上司 *M* との関係はブルジョワ階級とプロレタリア階級の関係ではないからである⁶⁾。

ここで次のような問いを発するならば、概念メタファー理論 [8, 9, 18, 19] の説明対象となる:

(9) *P* が (8a) と言うことを可能にしたのはどういう能力か?

これは能力 (competence) レベルの問いである。だが、能力は不問にし、*P* が *F* に (8a) と

言った状況について、次のようなより運用 (performance) レベルで詳細に問題を設定した場合には、これから見るような概念メタファー理論では説明が困難な特徴が露わになる:

(10) *P* が (8a) と言うまでに彼の脳内/心内で起こったのはどんな処理か?

2.2.2 詳細な問い

実際のところ、(8) の問いは曖昧な問いであり、次の (12)–(14) のように問題を細分化することで説明すべきことを明確化できる:

まず、(11) というテンプレートは *P* に利用可能なものだと想定しておく:⁷⁾

(11) きみはとんでもない上司に *V* されているなあ

その上で、次の状況を考える:

(12) 人物 *P* は友人 *F* から、彼の上司 *M* に正当な見返りなしにこき使われている状況を説明され、気の毒に思う。*M* は *F* をまるで自分の家畜か何かのようにこきつかっていて、それを当然と思っているようだ。*P* は *M* への義憤と *P* への同情を表わそうとして、(11) を使って何かを言おうとしたが、咄嗟には *V* に入るべき表現が思いつかない。だが、*P* は次のような幾つかの候補を思いつく:

(13) きみはとんでもない上司に

- a. 一方的に利用されているなあ。
- b. (ずいぶん(と)) ヒドイ目に遭わされているなあ。
- c. 取り憑かれているなあ。
- d. 憑依されているなあ。
- e. 魅入られているなあ。

⁶⁾ 加藤鉦三 (信州大学) より「ブルジョワ (階級)」や「資本家」と「プロレタリアート (階級)」や「労働者」というのは「*x* が *y* を搾取する」の *x*, *y* の代表例にすぎず、表現 (8a) がメタファー表現だと認定するには根拠が不十分ではないのかと指摘を受けた。確かに「搾取する」という動詞の意味を「不当に奪い取る」という意味で抽象的に考えるとそうなのだが、私にはそれは語の意味指定として弱すぎると感じる。私の感覚では、現代語日本語では「*x* が *y* を搾取する」という動詞は *x*, *y* に「ブルジョワ (階級)」と「プロレタリアート (階級)」以外の名詞を取れない特殊な用法をもつ動詞になっているように思われる。

⁷⁾ このようなテンプレートがどのように獲得され、どのように記憶に残っているかは、これからの探求に値する未解決問題である。この問題に対する私見は不完全ながら [21] の発展形として [23] で膨大な事例記憶に基づく言語知識と処理のモデル (model of knowledge and/or processing of language based on vast exemplar memories) として提示した。要旨を一言で言うならば、ヒトの言語知識を単に構文のネットワークをなしていると言うだけでは不十分であり、更に言うと「文法 (grammar)」はそもそも言語学者が作り出した虚構かも知れないという見解である (更に言うと、「語の意味」すらも虚構かも知れない)。

- f. 寄生されているなあ .
- g. 吸血されているなあ .
- h. 搾取されているなあ .
- i. 蹂躪されているなあ .
- j. 襲われているなあ .
- k. 飼育されているなあ .
- l. 経営されているなあ .
- m. 料理されているなあ .
- n. 翻弄されているなあ .
- o. 破壊されているなあ .
- p. 工作されているなあ .
- q. 釣られているなあ .

(14) P は少し悩んでから (13h) を選んで、 F にそう言った。 P の気持ちは F に伝わったようだった。

実際には、(12)–(14) が無条件に P の心内で起こったことの正確な再現であるとは言えない。特に候補の生成、選択は通常は無意下で起こっていると考えて良い。だが、以下では議論のために (12)–(14) がアルゴリズムレベルではそれなりに妥当な記述だと想定する⁸⁾。

2.3 強制選択課題としての産出

以上のモデル化には (15) という重要な含意がある:

(15) ((11) の実現に限らず) 言語表現の産出は有限個の候補からの強制選択課題 (forced choice task) (の組み合わせ) である。

(15) の理由は明らかである。どんなに多くても語彙的実現の可能性は有限だからである。だが、この有限性は何によって保証されているのだろうか?

2.3.1 反造語の原則と帰結

テンプレートの変項を語彙的に実現するという課題=処理が強制選択であるのは、次のことから明らかである:

(16) 反造語の原則:

⁸⁾ 実験的に検証されているとは言い難いが、これがそれなりに妥当な記述であると信じる理由は十分にある。少なくとも私は実際にこのような形で語の選択に迫られることが多いため、私としては一部にそういう感覚をもっていない人がいても、それは意識化の程度の問題だと考えたい。

完全に新規な概念化の内容 x を表現する場合ですら、 x を表現するために新しく語を作るとは、(ヒトは他の生物種と同じく本質的に「怠け者」なので)

- a. 処理負荷が高すぎる
 - b. 作っても理解されず、努力に見合わない可能性が圧倒的に高い
- という理由で、行われ⁹⁾ない。

これは究極的には最小労力の原則 (Least Effort Principle) [13] の原則に由来するものである。

2.3.2 多義性の原則

(16) には重要な帰結がある。それは次である:¹⁰⁾

(17) 多義性の原則:

- a. 語の意味は常に、生起環境=(生起)文脈ごとに拡張する (別の言い方をすれば、特定の環境=文脈内での意味の拡張は他の文脈での意味に影響しない)。
- b. 語は使われれば使われるほど多義的になる。
- c. このため、(私たちの直観に反して) 文脈に対して一定な語の意味が存在する可能性は自明ではない。

語の意味拡張が一定の環境=文脈内で起こるということは、文法化 (grammaticalization) [6, 7] などの現象を理解する上でも重要な点であるし、メタファー表現のターゲットの意味の語義としての定着=語義化を理解する上でも鍵になる点である¹¹⁾。

2.3.3 注意

(17a) について一点、補足する:

(18) 語の意味拡張が常に概念メタファーやメトニミーによって起こると考えるべき理由は

⁹⁾ 努力が見合うようなら、J. Joyce の *Finnegans's Wake* のような作品では、伝達の放棄と引換えにそれが実践されているように思われる。

¹⁰⁾ この多義性の基盤になる資源を表現するためのもっとも自然なモデルは [23] が提案した Pattern Lattice だろう。

¹¹⁾ この現象の詳細は [24] で議論されている。枠組みは異なるが関連する議論として [1] も参考にされたい。

どこにもないので、語の意味拡張の原因が概念メタファーやメトニミーであると言っても論点先取にしかならない(実際、概念メタファーは意味拡張のパターンを分類した結果にすぎない可能性が高い)。

2.4 強制選択下でのメタファー表現の産出の説明に必要なこと

(8)とは違い,(12)–(14)では P の心内で起こったことがモデル化されている(逆の言い方をすれば,(8)では P の心内で起こったことの実体が不問にされている¹²⁾。

妥当性の検討の余地があるとは言え, P の心内で起こったことが(12)–(14)の記述モデルの通りであれば、メタファー表現の(理解ではなく)産出について説明されるべきことは、以下のように二つあり、しかも二つしかない:

(19) 問題 1: 候補生成の問題

(13)の(メタファー)表現の候補群はどうやって生成されたか?

(20) 問題 2: 候補群からの最適要素の選択の問題

人物 P は(13)の候補群から(13h)を最適解(optimal solution)として選んだが,(13h)に最適性(optimality)を保証するは何か?

ただし,(19)と(20)にはおのおの、より個別的問題がある:

(21) (19)のより個別的問題として、

a. (13)にある候補は全部候補として生成されるべきものか? それは無用な候補を含んではいけないのか?

b. 候補に含まれる表現について、メタファー表現と非メタファー表現の区別には意味があるのか?

(22) 問題 3: 候補群の評価の問題

(20)のより個別的問題として、

a. (13h)の選択は P の意図を実現する唯一の可能性だったろうか?

b. 仮に(13h)ではなく,(13l)を選んでいたらどうなっていたろうか? 特に同情と義憤を伝えるという意図は伝わって

¹²⁾ (8)と違い,(12)–(14)は performance レベルの記述であると言ってもよい。

いたろうか?

以下ではこれらの問題に個別に答えて行き、概念メタファー理論が与える説明が強すぎる説明であることを明らかにする。概要は以下の通りである。

§3 でまず(22)と(21a)について簡単に答えを出してから §4 と §5 で残った問題に答えを出す。

3 概念メタファーの役割: 可能性 1

(8a)の選択が P の意図を実現するのに最適だったかどうかは、彼の意図が正確に表現され(望むらくは比較のための基準が数値化され)ていない限り、決めようがないことである。従って,(8a)が最適な表現であると保証することは無理である。

その一方で,(22b)の答えは明白であると思われる。 P が(23)と言っていたら、伝わっていない可能性の方が高いだろう:

(23) きみはとんでもない上司に経営されているなあ。

実際、次のことは明白であると思われる:

(24) (13)の候補集合で最適なものから最不適なものへの分布は連続的だが、それと同時に、適性のあるものと適性のないもの=不適なものとの境界は比較的明瞭である。

具体的に言うと,(25a)にある要素は適性が高い。(25b)の要素は無条件には V を実現できないが、非慣習的なメタファー表現としては選ばれる可能性のあるもので,(25c)に挙げた要素は適性が低く、非慣習的なメタファー表現としても選ばれる可能性の少ないものである。¹³⁾

(25) a. $V_g = \{ \text{一方的に利用され, ずいぶん(と)ヒドイ目に遭われ, 取り憑かれ, 搾取され, 魅入られ} \}$

¹³⁾ もちろん、このような二分化はすべての話者に共通である必要はない。重要なのは、候補の集合が適性のあるものとなしものものに二分される時、人によって集合の内容は異なるかも知れないが、 V_g と V_h と、 V_h と V_b との境界はおのおの、引こうと思って引けないような曖昧模糊としたものというよりは、個人個人ではかなり明確に引けるものだという事である。

- b. $V_h = \{ \text{寄生され, 吸血され, 蹂躪され} \}$
- c. $V_b = \{ \text{憑依, 飼育, 経営, 料理, 工作, 釣られ, 破壊, 襲われ} \}$

3.1 問題の明示化

ここで問題になることは二つある。一つは(25a)のような正例の認可だけでなく、(25c)のような負例=反例の排除であり、もう一つは(25a)と(25b)の性質の違いである。

第一の問題はメタファー(表現)の説明で本質的に重要である。概して言うと、概念メタファー理論では正例の認可のみが説明の対象になっており、負例の排除は問題であることが認識されていない状態である¹⁴⁾。

第二の問題の提起する問題は概念メタファーによって認可される慣習的メタファー(表現)とアナロジーによって認可される非慣習的メタファー(表現)の区別に関するだろう。

3.2 候補生成の効率化 1

以上の観察に基づいて(21a)に対する問題を明確にすることができる:

(26) 制約された候補生成:

候補生成が効率的に起こるためには、(25a)のような「適性のある」候補を生成し、(25c)のような「適性のない」候補を生成しないようになっていけばよい、つまり候補生成が適当に制約されていけばよい。

だが、実際のところ、(26)は「言うは易し、行なうは難し」である。この場合、「行なう」とは問題となる制約の実装(implementation)である。

¹⁴⁾ 負例の排除の必要性は、写像の抜け[5]やまだら問題[15]の解決の必要という形で認識が始まっているが、その認識自体、概念メタファー理論の歴史では、比較的最近のものであるし、それを解消するために提起される研究でも、この問題が概念メタファー理論全体に対してもっている意味を過小評価しているように思われる。それが示唆している概念メタファー理論にとって最悪の可能性は、これまで体系的だとされてきた概念メタファーの実体は事例記憶の副産物でしかないという結論である。この含意は、「メタファーはヒトの「思考の癖」ではなく、「語りの癖」以上でも以下でもない」というものである。これはヒトの言語知識が膨大な事例記憶に基づくものであれば証拠なしに否定できるほど瑣末な可能性ではない。

3.3 候補生成装置としての概念メタファー

興味深いことに、概念メタファーはここに一つ有効な有効な利用法を見いだすことになる。具体的には次のような仮説を出すことができる:

(27) (26)の意味での「適性のある候補」は概念メタファーによって生成されたものであり、それに限る。

この線に沿って、(25c)の候補が不適な理由は、部分的には次のように説明することができる:

(28) (25c)の表現—特に飼育され、経営され、料理され、工作され—ではFがMの恣意的な行動の〈犠牲者〉(か少なくとも〈被害者〉)であることが表現されていない。

〈犠牲者〉という概念が鍵であることがわかれば、[[犠牲者はSである]]か[[加害者はSである]]という形の概念メタファーを使って効果的に候補生成が可能である。具体的には、(25a)にあるような適性のある候補は(29)のような概念メタファーがあれば効率的に生成されるし、また概念メタファーがない限り生成されないということである:

- (29) a. [[被害者はブルジョアから見たプロレタリアートである]]か[[加害者はブルジョアである]] ⇒ (13h)を生成あるいは認可
- b. か [[被害者は被寄生者である]]か [[加害者は吸血鬼である]] ⇒ (13g)を生成あるいは認可
- c. [[被害者は被寄生者である]]か [[加害者は寄生者である]] ⇒ (13f)を生成あるいは認可
- d. [[被害者は崇られ手である]]か [[加害者は幽霊か亡霊である]] ⇒ (13c)を生成あるいは認可
- e. [[加害者は悪魔である]] ⇒ (13e)を生成あるいは認可
- f. [[加害者は戦車(を率いる部隊)である]] ⇒ (13i)を生成あるいは認可

3.4 利点と弱点の裏腹

候補生成に使うのはそれなりに見通しのある概念メタファーの利用法だと考えられるが、それには裏腹な面がある:

(30) 外的評価の必要性:

概念メタファーを候補生成の最適化に使った場合、(20) が問題にする選択された要素の最適性を与えるものは別に存在しなければならない。

(31) 「襲われている」「破壊されている」が候補生成から排除されることになり、修正が必要である(が、これは選択の最適性を与えるものが概念メタファーとは別に存在すると想定すれば回避可能)。

実際、(30) の下では次のことが真であるはずである:

(32) (25a) の場合に限らず、概念メタファーを候補生成の最適化のための制約と考えた場合、概念メタファー $M = \{m_1, m_2, \dots, m_n\}$ が生成した候補 $C = \{c_1, c_2, \dots, c_n\}$ には—概念メタファー自体に順位づけがない限り—どれにも適切性に違いはなく、最適な候補の選択を保証しない (M は概念メタファーの全体集合だとする)。

ここでは「概念メタファー自体に順位づけがない限り」という条件が重要である。概念メタファーに固有の順位づけ $R(M) = m_1 > m_2 > \dots$ が備わっているならば、それに応じて表現の候補の適性を $c_1 > c_2 > \dots$ と一意に順位づけできる ($m_i > m_j$ は m_i の優先順位が m_j の優先順位よりも高いことを表わし、 $m_i = m_j$ は m_i の優先順位と m_j の優先順位が等しいとする)。

これは理論的に可能だが、経験的に有意な予測を可能にするとは考えにくい。というのは、次が前提となるからである:

(33) 概念メタファーの順位づけ $R(M)$ は、課題によらず一定である。

これが事実と合っているためには少なくとも次のことが起こっていないことが示されている必要がある:

(34) m_i, m_j, m_k をおのおの概念メタファーとする時、次のような循環性は決して生じない:

- a. $m_i > m_j$
- b. $m_j > m_k$
- c. $m_k > m_i$

これは誤りだとは証明されていないが、正しいことも示されていない(個人的な見解として言えば、(34) が経験的に妥当だと信じる根拠はどこにも見当たらない)。

一方、もし $R(M)$ が一定でなく、課題の性質に応じて動的に可変なもの(つまり順位を変えることが可能)ならば、それは実質的に c_1, c_2, \dots, c_n を $R(M)$ とは独立の基準で順位づけしているのと同じであり、概念メタファーを候補生成の最適化に使うという理由が消滅する。

以上のことから判断すると、概念メタファーを候補生成の最適化に使うのはあまり良いモデル化とは言えない。次の節では別の利用法を考えてみる。

4 概念メタファーの役割: 可能性 2

4.1 無制限な候補生成の下での選択

候補生成の工夫をしないとすれば、次のように考える以外に道はない:

- (35) a. (11) を基にした候補生成は概念メタファーには拠らず、別の形で行われる。この候補生成の仕組みを仮に G とする。
- b. G による候補生成は課題 T の下で最大限に強力なもの、すなわち可能なものを全部列挙するという事前知識の不要な処理である。このようにして生成された候補集合を $C(T) = \{T|c_1, c_2, \dots, c_n\}$ とする。
- c. (11) の V に適当な表現を選ぶという課題 t_1 で生成される候補集合 $C(t_1)$ は、 V が日本語の動詞である表現の全体集合である(従って、(13) は $C(t_1)$ のほんの一部にすぎない)¹⁵⁾。
- d. 一般に、候補集合 C からの k 個の要素

¹⁵⁾ 「雨に降られる」のような、いわゆる「迷惑受け身」や「電車に揺られる」のような他動形なし受け身があるため、 V の候補を他動詞に限るわけには行かない。

の選択は、

- i. C の要素を一意に順序づけ、
- ii. それから上位の k 個を取る

ことで達成される。

- e. (11) の V に適当な表現を 1 つ選ぶという課題 t_1 では、(11) の V が具体的な動詞になっている文の集合を生成し、その要素をすべて P の意図 $I(P)$ の表現として順序づけ、その最上位の要素を取ることである。

4.2 濾過器の一部としての概念メタファー

以上のモデル化の下で概念メタファーが果たしうる役割は次のもの以外ではありえない:

- (36) (11) の V が具体的な動詞になっている表現の集合の順位づけに概念メタファーが使われる。

最適性理論 (Optimality Theory: OT) [10] の用語を使って言うならば、概念メタファーは (EVAL 部門を構成する) 違反可能な (出力) 制約 (**violable (output) constraints**) として機能するということである¹⁶⁾

もちろん、これが説明としてうまく行くには順位づけの具体的な手順がアルゴリズムとして明確化されていることが前提となる。その手順の明確化なしでは、このモデル化もメタファー表現の産出に対して、反証不能で空虚な説明を与えるにすぎない。

私自身は、今のところ順位づけを与える手順は見つけていないが、それは原理的に発見不可能ではないと想定する。

4.3 概念メタファーは (それ自体では) 表現を生成しない

(36) の妥当性は無条件ではないとは言え、それには幾つかの重要な含意がある。その内でもっと重要だと私が考えるのは次である:

- (37) (メタファー表現の産出に関する限り) 概念メタファーは表現を生成しない¹⁷⁾。それは

¹⁶⁾ ただし、OT の制約と違って貢献の度合いが一定ではなく、また制約の数が多いので、違反によって減点が発生する方式ではなく、順守によって得点が発生する方式の方がモデル化がしやすいだろう。

¹⁷⁾ 「“生成” はここでは意味のないメタファーだ」とかい

別の仕組み G で生成された表現群を (一定の条件の下で) 評価する際に評価基準として使われるだけである。

4.3.1 注意 1

以上のモデル化からの予測の適応範囲は産出に限られる。メタファー表現の理解に関しては、概念メタファーが別の役割を演じている可能性がないとは言えない。だが、その役割が何であろうと概念メタファーがメタファー表現の生成には関与していないという結論は変わらない。概念メタファーがなくても非字義通りの意味を伝える (かも知れない) 表現は生成できる。問題はそれが表現として十分な適性をもったものではない可能性が高いという問題があるだけである。

一方、表現の適性は概念メタファーが与えられただけでは決定されない。従って、概念メタファーは不十分である。つまり、概念メタファーはメタファー表現の産出の説明については明らかに十分な要素ではないし、その必要性に関しても不明瞭な面がある。

4.3.2 注意 2

以上のモデル化に対する次の (38) の反論はありがちなものだが、経験的に有効な反論ではない:

- (38) (11) の V を語彙的に実現するという (ありふれた) 課題で、 V のあらゆる可能性が全部生成され、順位づけられ、評価されるというのはあまりに非効率的で、処理としてありえない。

ヒトの脳は高度に並列、分散的な処理を行っており、このような処理が負担になっている証拠はない (実際、このような処理は直列処理では深刻な速度低下の原因になる)。[21] で論じたように、「 V のあらゆる可能性が全部生成され、順位づけられ、評価される」という (一見するとバカバカしい) 可能性は — 十分な証拠はなく、多めに議論の余地があるとは言え — 理論言語学でもっと真剣に考慮されるべき可能性であり、お

う幼稚な反論を論駁するのは時間のムダだと思われるので、試みない。

そらくそれなりにモデル化に成功する見こみのある可能性でもある。

次の節では概念メタファーが果たしうる役割の最後の可能性を検討する。

5 概念メタファーの役割: 可能性 3

(35) はあまりに非効率的であり、候補生成をもっと効率化できないものか? という疑問をもつに至るのは十分に動機のあることだ。概念メタファーが候補生成の仕組みと見なすことには困難が伴うことはすでに §3.4 で見た通りだが、それに代わる制約として別のものを考えることには意味がある。

5.1 候補生成の効率化 2

実際、(11) のように V に動詞を入れて候補を無作為に生成する必要はないかも知れない。必要なのは次のように生成される候補集合でもよいはずである:

- (39) P が今まで聞いたり読んだりした表現は全部記憶 M 内に覚えていると想定して、
- a. M にある (11) を実現している表現をすべて列挙する。この結果を候補集合 C_0 とする。
 - b. C_0 の要素のおの概念メタファー m_1, m_2, \dots, m_n を適用し、それによって得られた新しい表現を C_0 に追加し、候補集合を拡大する。この結果を C_1 とする。

C_1 は—概念メタファーが有意義な一般化を与えている限りでは— (11) の V を無条件で動詞で実現して得られる集合より明らかに小さい。従って、これはより少ない候補を生成するという意味で望ましい制約であり、また用法基盤の原則と一致するという点でも望ましい制約でもある。

5.2 制約の成立条件

だが、問題は概念メタファーを使ってどうやって既存の用例を拡張するか、である。特に問題となるのは適用条件の明確化である。これがうまく行かないかぎり、この手法は「絵に描いた餅」である。

5.2.1 動詞の換言の成立条件

一般に動詞 V_1 の、他の動詞 V_2 への言換 (paraphrase) がうまく行くには、 V_2 による V_1 の語義の保存が不可欠である¹⁸⁾。その実現のためには V_1 と V_2 でおのの項となっている名詞に関する知識が必要である。このような知識の特定が—概念メタファー理論が実際にそうしているように—概念メタファーの存在を前提にするものであるならば、この処理は循環的になり、何も生み出さない。

V_1 が非メタファー的 (e.g., 「一方的に利用され」)、 V_2 がメタファー的な表現 (e.g., 「搾取され」「寄生され」) を生み出すとした場合、ここで問題になっている換言は、 V_1 という動詞の意味の、 V_2 という語の意味の意味を使った換言に等しい。

この換言が可能であるためには、例えば V_1 が非メタファー的、 V_2 がメタファー的な表現を生み出すとした場合、先領域に相当する V_1 の概念の、元領域意に V_2 から独立した記述が不可欠である。そうでなければ換言は成立しない。これは V_1 が抽象的な概念であっても同じことである。これが意味していることは次のことである:

- (40) 元領域から先領域へのメタファー写像は、先領域の概念構造の特定に先立つことはない (さもなければ、 V_2 による V_1 の意味の近似的換言は成立しない)。

これは明らかに概念メタファー理論の主要な

¹⁸⁾ これを拡張 (extension) というのは二重の意味で不適切である。第一に、そう言うことは実質的に何の説明にもなっていない。第二に、(認知) 言語学で一般に拡張 (extension) と呼ばれているのは同一の語の用法/意味の変化であり、別の語の間の意味関係ではない。例えば (11) の実現形「きみはとんでもない上司に一方的に利用されているなあ」と「きみはとんでもない上司に搾取されているなあ」を比較しよう。前者の表現が後者の表現で換言されていると言うことが可能である。だが、この際、「一方的に利用されている」という語句の意味が「搾取されている」の意味に拡張されていると言うべき理由はまったくない。拡張があるとすれば、それは「搾取されている」という V_2 (つまり言換する側) の用法の内部に限ったことであり、 V_1 の (換言される側の) の用法の内部ではない。従って、ここで言う候補集合の拡大は V_1 側の問題なので、認知言語学で言うところの (語の) 意味の拡張とは別の現象である。

テーゼの一つと矛盾する。

5.2.2 補足¹⁹⁾

以上の考察の発展形として次のような予測を立てることが可能である:

- (41) a. メタファーの体系性は元領域の認知的単位 (e.g., 状況) を喚起する用語群の密度の関数であり, それによって近似できる。
- b. メタファーの成立条件が語彙タイプ (e.g.,) ごとに異なる (り, その結果, 出現頻度が異なっている)。

いずれも妥当性をコーパス事例調査によって確かめることができる。

5.2.3 翻訳としてのメタファー²⁰⁾

これは次のことを含意する:

- (42) 強制選択の元でのメタファー表現の生成は, 先領域の概念の, 元領域の用語を使った換言 (paraphrase) = 一種の翻訳 (translation) という形でしか成立しない²¹⁾。

このことから, (39) で素描した, より制約された候補生成モデルを採用しても, 概念メタファー理論の主張の一つ「抽象的概念は具体的概念を通じてのみ理解可能となる」は維持不可能であることが帰結する。

5.3 制約アリ生成と制約ナシ生成の差

だが, 実際のところ, (39) の概念メタファーで制約された候補生成モデルと (35) の制約されていない無作為候補生成モデルとの差は明白ではない。候補は常に複数あり, 最適な (k 個の) 候補を選ぶための順位づけは, どちらのモデル化でも必要だからだ。両者の違いは評価しなければならない候補の数でしかない。

仮に候補の数の差が数桁違ってても, 脳の処理の並列, 分散性を考えれば, 無制限な候補生成モデルも制約アリの候補生成モデルに比べて致

命的な難点をもっているとは言えないように私には思われる。

候補の数の差は何に由来するのかを考慮する必要がある。それは発話 (とその理解) が比較的短い一定の時間内で達成されなければならない課題であるという外的要因によるものであるという条件に由来する可能性がもっともありそうな話だ。とすると, メタファーはヒトの認知や知識の構造得に由来するというより, 発話処理の効率に由来すると考える方が正しい理解に繋がる可能性がある。

更に言えば, 概念メタファーは無作為候補生成に続く順位づけ処理が何度も反復され, ルーチン化したものでしかない可能性がある。この種のルーチン化が許されるならば, 制約アリのモデルと制約ナシのモデルの差は実質的にないに等しいとも言える。

5.3.1 概念メタファーの出番は本当にあるのか?

付記しておくならば, (39a) は間接的に (21b) の問題にも答えている。記憶 M の中に残っている表現がメタファー的か否かは無関係である可能性があり, 実際にそうである可能性が高い (実際, 上の §5.2.1 の設定で V_1 が V_2 に言換えられるのは, V_1 が非メタファー表現だからではなく, それがメタファー表現だろうとなかろうと, 十分にうまく言いたいことを表わしていないからである)。

だが, この一方, 本当に新規な例の生成に役に立っているのは概念メタファーというより, アナロジーであるとも言える²²⁾。概念メタファーは慣習的メタファーを説明するには便利だが, 非慣習的メタファーを説明するには適していない。なぜなら, 概念メタファーで問題になるのは言語の表現の体系性だからだ。となると, どの道, 概念メタファーには出番がないということになる。

¹⁹⁾ 2008/06/25 追加

²⁰⁾ 翻訳としてのメタファーというメタファー観は中本敬子 (文教大学) の指摘によれば, アリストテレスと同じぐらい古い。

²¹⁾ これはアナロジーの一般理論にとっては別に驚くべきことでも, 困ったことでもない。これで困るのは概念メタファー理論だけである。

²²⁾ ただ, これとは別に概念メタファーの内, 非慣習的メタファーはアナロジーと区別がつかず, 慣習的メタファーと呼ばれるものは語彙化されていて, 生産性が低いことが示唆されている [24]。これは概念メタファー論者にとってはジレンマであろう。これは概念メタファーによって制約された候補生成のシナリオが破綻している可能性を間接的に示唆している。

5.3.2 認知の「パターン」が先かコミュニケーションの「戦略」が先か²³⁾

メタファー表現が発話の処理の最適化に由来するという仮説と、それがヒトの認知の仕組みや知識の構造に由来することは排他的ではなく、両立可能なことである。だが、これは両者に優先順位がないということではないだろう。少なくとも言語に関係する部分に関しては、私は認知の構造がコミュニケーション上の適応の産物であると考えてるのが妥当だと思う。

ここで考えるべきことは「ヒトの認知の仕組みがこうなっている(例えば概念メタファーによって影響されている)から、ヒトの表現がこうなるのだ」と短絡する前に「なぜ一定の認知の仕方が獲得されたのか?」ということである。論点先取を避けるために、まずもって検討しておくべきなのは(43)の可能性である。

- (43) 問題となっているヒトの認知の仕組み(≈概念化のパターン)は、それ自体がコミュニケーション上の適応の産物かも知れない。

この可能性を潰さずに「ヒトは身体を通して世界を知覚しているから、ヒトの認知が身体性を反映するのは当然だ」という説明に飛びつくのは、論点先取の誹りを免れ得ない。

実際、次のように考えた方がよりよい説明を見いだせるという条件は十分に揃っていると私は思う:

- (44) a. ヒトは(他の生物を同じく)しなくていいことはしないはずなので、脳内の知識の構造や認知のモードの変化は、外からの淘汰圧がかからない限り、起こらない。
b. その淘汰圧の発生源がコミュニケーション上の適応、特に話し手と聞き手の共進化である。

もちろん、これは概念メタファー理論の提供する説明とは矛盾する。だが、それは誤りの証拠ではない。

²³⁾ この節の内容は中川奈津子(京都大学大学院)のコメントを受けて執筆された。重要な点を指摘してくれたことに関し感謝したい。

6 終わりに

概念メタファー理論(CMT)[8, 9, 16, 17, 18, 19]では話し手と聞き手にとってメタファー表現が異なる存在理由をもつ可能性を考慮していないため、条件の指定不足によって幾つかの誤った一般化を導いている。それは一面では必要な指定が不十分であり、別の面では指定が強すぎる。指定が弱いというのは、例えば特に話し手にとってメタファー表現の使用は(少なくとも非メタファー表現の使用に較べて多くの)誤解のリスクを負ってもなおおられるという現実を説明するほど指定の強いものではない点である。指定が強いのは、言語表現に認められるパターンはすべて概念化のパターンの反映であるという強い解釈を強要する。メタファー表現の産出を一種の強制選択課題の結果と見なした場合、これは明らかに妥当性を欠く一般化である。

このノートで私は一般に表現の産出を強制選択課題だと見なした場合、メタファー表現の産出で概念メタファーが果たしうる役割をすべて考察し、それが候補生成に役立っていると考えられる理論的根拠が薄弱であることを示した。このことから考えても、概念メタファーに記述的一般化以上の意味づけを求める根拠は控え目に言っても薄弱であると私は結論する。

この結論の下で「概念メタファーとは要するに何か?」と聞かれたら、私は次のように答える:

- (45) 概念メタファーの体系は
a. 第一に聞き手にとっての一定の労力の範囲内で解釈の可能性の空間 S_h を記述したものであり、
b. 第二に話し手にとっての一定の労力の範囲内の表現性を損わない言換の可能性の空間 S_s を記述したものである(S_s は S_h に対して相対的に定義される)。
(46) a. ただし「一定の労力の範囲内で」という制限が外れると、 S_h もずっと大きくなる可能性がある。
b. 従って、 S_h や S_s が—概念メタファー理論が主張するように—限定された範囲にしかない(ように見える)のは、ヒトの発話の処理労力の上限からくる派

生的特徴である可能性がある。

概念メタファー理論は「一定の労力の範囲内で」という制限を考えないばかりでなく、聞き手にとってのメタファー表現の価値だけを考え、話し手にとってのメタファー表現(を選ぶ際の)の価値を考えないでメタファーの理論化を行なっている。それが目指すところはヒトの認知の仕組みの解明であり、非常に野心的なのであるが、私にはそれに実質が伴っているとは思われない。私が繰り返し概念メタファー理論を批判するのは、この明白な理論的不備からである。

とはいえ、このノートの考察からメタファー表現が話し手の心の中でどのように理解されるのかがわかるわけではない。そのためには、まず理解のプロセスをしっかりとモデル化し、そのモデルの予測を事実と合わせて評価することが必要である。そのモデル化の際には、ブレンド理論 [3, 4] のような制約の緩いモデルに訴えるよりは、生成辞書理論 [11] のような制約の明確なモデルを使った考察が有効であろう。特に [20] に概略を示したように、共合成 (co-composition) の考えを使った記述は見こみがあると思われる。

参考文献

- [1] N. Asher and A. Lascardes. Metaphor in discourse. In P. Bouillon and F. Busa, editors, *The Language of Word Meaning*, pages 262–290. Cambridge University Press, 2001.
- [2] D. Blakemore. *Semantic Constraints on Relevance*. Blackwell, Oxford, UK, 1987.
- [3] G. R. Fauconnier. *Mappings in Thought and Language*. Cambridge, MA: Cambridge University Press, 1997.
- [4] G. R. Fauconnier and M. Turner. Conceptual projections and middle spaces. Cognitive Science Technical Report (TR-9401), Cognitive Science Department, UCSD, 1994.
- [5] J. Grady. Theories are buildings revisited. *Cognitive Linguistics*, 8(4):267–290, 1997.
- [6] B. Heine, U. Claudi, and F. Hünemeyer. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. University of Chicago Press, 1991.
- [7] P. J. Hopper and E. C. Traugott. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- [8] G. Lakoff and M. Johnson. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press, 1980. [邦訳: 『レトリックと人生』(渡部昇一ほか 訳). 大修館.]
- [9] G. Lakoff and M. Johnson. *The Philosophy in the Flesh*. Basic Books, 1999.
- [10] A. S. Prince and P. Smolensky. Optimality theory: Constraint interaction in Generative Grammar. Technical Report No. 2, Rutgers University Center for Cognitive Science, 1993.
- [11] J. Pustejovsky. *The Generative Lexicon*. MIT Press, 1995.
- [12] D. Sperber and D. Wilson. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell, 2nd edition, 1995.
- [13] G. K. Zipf. *Human Behavior and the Principle of Least Effort*. Addison-Wesley, Cambridge, MA, 1949.
- [14] 東森 勲 and 吉村 あき子. 関連性理論の新展開: 認知とコミュニケーション. 研究社, 2003.
- [15] 鍋島 弘治郎. 水の比喻 (メタファー): 日本語の比喻研究における方法論に関する一考察. 2000.
- [16] 鍋島 弘治郎. 有情と比喻: 見立てによる構文や表現の拡張. 2001.
- [17] 鍋島 弘治郎. GENERIC IS SPECIFIC はメタファーか: 慣用句の理解モデルによる検証. In 日本認知言語学会第 2 回大会 *Conference Handbook*, pages 141–148. 日本認知言語学会 (JCLA), 2002.
- [18] 鍋島 弘治郎. 領域を結ぶのは何か: メタファー理論における価値的類似性と構造的類似性. In 日本認知言語学会論文集第 3 巻, pages 12–22. 日本認知言語学会 (JCLA), 2003.
- [19] 鍋島 弘治郎. 黒田の疑問に答える: 認知言語学からの回答. *日本語学*, 26(3):54–71, 2007.
- [20] 黒田 航. メタファー理解の状況基盤モデルの基本的な主張: 概念メタファー理論との比較を通じた解題. <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/smmc-in-a-nutshell.pdf>, 2007.
- [21] 黒田 航. 徹底した用法基盤主義の下での文法獲得: 「極端に豊かな事例記憶」の仮説で描く新しい筋書き. *月刊言語*, 36(11):24–34, 2007. 原典版: <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/la-with-rich-memory-full.pdf>.
- [22] 黒田 航. 鍋島氏からの反論に対する幾つかの異論. <http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/reply-to-nabeshima-07-abridged-v1-sc.pdf>, 2007.

- [23] 黒田 航 and 長谷部 陽一郎. Pattern lattice を使った (ヒトの) 言語知識と処理のモデル化. In 言語処理学会 15 回大会発表論文集. 2009. C4-4.
- [24] 松本 曜. 概念メタファーと語彙レベルのメタファー研究. In 日本認知言語学会論文集, Vol. 6, pages 519–522, 2006.